

本棚



ザ・原発所長

黒木 亮 著



東京電力(株)福島第一原子力発電所事故から5年が経過した。放出された放射性物質で汚染された地域から避難を余儀なくされた人達の故郷への帰還が始まっている。ウェザリング効果と除染が進行している成果である。昨今の福島県内で生産される食品中の放射能検査では、一部の野生

の動植物を除いた食品中の放射能は基準値以内である。事故炉の低温冷却も継続しており、全体的に事故はおおむね安定状態であるといえる。しかし、帰還する故郷は、放射能レベルは下がっても生活の場としての復興はまだまだ進んでいない。除染廃棄物をはじめ特別措置法に基づく大量の放射性物質の汚染廃棄物は未だ処分する場所が定まっていない。事故サイトから管理されていない放射性物質の放出も少量ながら続いており、事故炉内の状況は自走ロボット、ミュオン等の技術を用いて探査が進められているがほとんど解明されていない。福島復興・廃炉への道はまだまだ遠いといえる。今、福島原発事故をもう一度顧みる時、肩の凝らない一冊として本書を推薦する。

本書はフィクションである。“巨大企業・首都電力”が“東京電力”を、“奥羽第一原発”が“福島第一原発”を、そして主人公“ザ・原発所長の富士祥夫”が故“吉田昌郎氏”をモデルとし、史実を基とした小説である。フィクションであるがゆえに仔細な事柄にこだわることなく、事故の本質に迫ることに成功している。

本書は上下二巻に分かれている。上巻では、原発所長の生い立ちから原子力発電所の建設から運転までの状況が、下巻では、原発事故を引き起こす予兆と事故時の状況、そして主人公が死亡するまでが描かれている。

主人公は鉄腕アトムに原子力の無限の力と人類の明る

い未来に思いを馳せ、志高く原子力発電を目指して電力会社に入社する。一方、「しかし、あんなところに、原子力発電所を造るのですかね」「あんなところだから造れるのだろ」過疎からの脱却を目指し誘致を進める地元と金と利権にまみれた政財界を背景に、国策として原子力発電所の建設が進められる。「この業界は不審死が多い」と話し、政治家への裏金づくり・議員工作に奔走する電力会社の“裏街道の男”が内部告発をした後、謎の行方不明となる。また、主人公の学生時代の恩師は「原発は絶対の安全だという、安全神話の行き過ぎだろうね。社会や国民から安全性に疑問を抱かれないようにしようとするあまり、ボタンを掛け違えているとしか思えない」と言う。スリーマイル島原発事故、チェルノブイリ原発事故、JCO 臨界事故等が発生する中、事故から教訓を得るのではなく、ひたすら日本の原発の安全性を強調する。また、営業運転開始時期の原子炉緊急停止、燃料破損に伴う放射性廃棄物の海洋への放出、臨界事故の発生、シェラウド、ボルト、ジェットポンプの配管のひび割れの虚偽の報告等、事実の隠蔽・偽装工作が行われる。原発の安全神話が本当の安全の構築を妨げる。

登場人物達は、古文書等から津波の高さを 15.7 m と想定するが経済性を優先し有効な手段を講じようとしないう。そして、運命の日の平成 23 年 3 月 11 日金曜日、大地震・大津波に引き続き原発事故が発生する。未経験の大惨事の中、現場の作業員達は戸惑いながらも、使命感に基づき不眠不休の努力を続け、原子炉本体の爆発を防止する。本店、政府官邸は知識不足の中、無用な口出しで現場作業を混乱させるが、所長の独断で、事故炉内への海水注入を続け、更なる大惨事を免れる。事故が終息に向かう中、主人公は「技術に携わる者として、謙虚さが足りなかった」と己の未熟さを嘆くこととなる。

今、アイソトープ・放射線の分野において“安全文化の熟成”が求められ、数年先には法制化の動きがある。安全文化はマニュアル化されたものではなく、ましてや規制当局により作り上げられるものではない。トップの管理者・放射線取扱主任者が自らの頭で考え、各事業所が独自の安全文化を構築していかなければならない。本書は、放射線分野における“安全”を考える上にも是非一読していただきたい一冊である。

(公益社団法人日本アイソトープ協会 二ツ川章二)

(〈上巻〉 ISBN978-4-02-251285-7, 〈下巻〉 ISBN978-4-02-251286-4, 四六判, 〈上巻〉 336 ページ 〈下巻〉 352 ページ, 定価本体 1,700 円 (税込), 朝日新聞出版, ☎ 03-5541-8757, 2015 年)